

# 和洋中のザクロ話

山梨大学生命環境学部 村松 昇

## はじめに

最近、ザクロについて調べています。日本人とザクロとのつながりとしては、かつては、アルカロイドの一種であるペレチエリンが、根や樹皮に含まれることから、駆虫薬として利用してきました。例えば、芥川賞作家である開高健の自伝的小説「青い月曜日」の中で、主人公が戦後の混乱期にアルバイトを転々とする中で、「柘榴根皮」を粉にして薬にする工程がえがかれています。

また、ザクロの花は、一般には赤い色をしています。白い花や、絞り咲き、八重咲きの品種もあります。これらの花が珍重されて、明治中期～大正時代には一時期、花ザクロが花木盆栽として大変はやった時期もあったようです。

一方、海外では、最近、果実に含まれるポリフェノールを中心に、虚血性心疾患やがん予防効果などが明らかになってきて、その機能が注目されています。アメリカやスペインをはじめとした欧米各国だけではなく、ヨーロッパなどへ輸出するためイスラエルやトルコなどといった中近東の国々でも、その生産が10年ほど前から急速に伸びています。

ザクロはシュメール文明の発祥の地、チグリス・ユーフラテス川の地域で、紀元前から栽培されている植物です。そのため、神話など様々な形で取り上げられています。「和洋中」というと料理のようですが、それぞれの地域の話を見てもザクロの特徴も見えてきます。

そこで、今回はザクロにまつわる古今東西の話を紹介します。肩の凝らない気楽な読み物として読んでいただくと幸いです。

## 「和」のザクロ話

夜叉毘沙門天の部下の武将八大夜叉大将の妻は、自ら500人(千人、または1万人との説もあります。)の子供の母であるにも関わらず、しばしば人間の子を捕えて食べてしまうため、多くの人々から恐れ憎まれていました。

それを見かねたお釈迦様は、人間を救うと共に彼女も救済しようとお考えになり、彼女が最も愛していた末子の愛奴児をお隠になられました。彼女は半狂乱になって世界中を7日間探し回りましたがわが子を発見できません。そこで、お釈迦に縋ることにしました。

お釈迦様は、子を失う親の苦しみを悟らせて、仏法に帰依させました。かくして彼女は仏法の守護神となり、また、子供と安産の守り神となりました。

鬼子母神の像は天女のようなお姿をしていて、子供を1人抱いて、右手には吉祥果を持っています。ただし、本当は、吉祥果はザクロではなく、中国で仏典を漢訳したときに、ザクロで代用表現したものと考えられています。また、鬼子母神が人間の子を食べるのを止めさせるために、人肉の味がするザクロを食するように釈迦が勧めたからなどと言われるのは、日本で作られた挿話なようです。



鬼子母神の図

## 「洋」のザクロ話

西洋においてもザクロは種が多いので、しばしば豊穰の証としてえがかれています。例えば、ルネッサンス期のイタリアの画家ポッティチェリによる「聖母子」にもマリア様がザクロの実を手にとっておられます。

西洋でザクロがでてくるお話というとギリシャ神話のペルセポネの話が有名で、ザクロに関する海外の文献には必ずと言っていいほどこの逸話が掲載されています。

ペルセポネは、野原で妖精達と共に花を摘んでいました。その中にひととき美しい花が咲いていたので、ペルセポネがその花を摘もうと妖精たちから離れた瞬間、急に大地が裂け、黒い馬に乗った冥界の王ハデスが現れ彼女は冥府に連れ去られてしまいました。

ペルセポネの母デーメーテルは行方不明になったペルセポネを探していると、太陽神ヘリオスから、ゼウスとハデスがペルセポネを冥府へと連れ去ったことを知らされます。そこで、デーメーテルはゼウスの元へ抗議に行きますが、ゼウスは取り合わず、「冥府の王であるハデスであれば夫として不釣り合いではない」といいました。

娘の略奪をゼウスらが認めていることにデーメーテルは激怒し、オリュンポスの元を去り大地に実りをもたらすのをやめ、地上に姿を隠してしまいます。

その後ゼウスがヘルメスを遣わし、ハデスにペルセポネを解放するように伝えます。ハデスもこれに応じる形でペルセポネを解放しました。その際、ハデスがザクロの実を差し出します。そこでペルセポネはザクロの実の中にあつた 12 粒のうちの 4 粒（一説には 6 粒）を食べてしまいました。

ペルセポネはデーメーテルの元に帰りましたが、冥府の食べ物であるザクロを食べてしまった事を母に告げます。冥界の食べ物を食べた者は、冥界に属するという神々の取り決めがあつたため、ペルセポネは冥界に属さなければならないことになりました。食べてしまったザクロの数の期間だけ冥府で暮らす事になり、1年のうちの 1/3（または 1/2）を冥府で過ごす事となりました。そして母デーメーテルは、娘が冥界に居る時期だけは、地上に実りをもたらすのを止めるようになり、これが冬の始まりだと伝えられています。

ちなみに、このギリシャ神話の逸話に似た話は、実は日本神話にもあります。ギリシャ神話のように食べ物の種類は具体的には書かれていませんが、イザナギとその妻のイザナミの話の中で、イザナミが「黄泉の国」の食べ物をすでに食べてしまつていたため、生者の元に帰ることができないとした一節があり、日本とギリシャという離れた地域に類似した神話があることは、大変興味深いところです。

## 「中」のザクロ話

最後は「中」、中国におけるザクロに関わる詩についてです。

「紅一点」という慣用句は、「多数の男性の中に女性が 1 人いる様」や「多数の中で異彩を放つもの」として使われています。

しかしもともとは、「紅一点」ということばは、異説もありますが、北宋の政治家で詩人の王安石の「咏石榴詩（ザクロを詠ずる詩）」に由来すると言われてています。

万緑叢中紅一点（一面の緑の中にただ一つ紅い花が咲いている）

動人春色不須多（人を感動させる春景色はなにも量が多い必要はない）

木々も草むらも緑一色の中、ザクロの木が艶やかな紅色の花を一輪つけている。紅色は緑に映える。しかも、一輪だけだから一際目立つことを表しています。これが転じて、上記の慣用句が生まれたと考えられています。



ザクロの花

## おわりに

今回はザクロにまつわる比較的有名な話を取り上げてみました。皆さんもご存じの話も多かったと思います。ザクロは、古い歴史のある植物ですので、この他に様々な逸話や昔話があろうかと思ひます。また機会があれば紹介したいと思ひます。

日本でザクロというと、庭木のイメージが高く、果樹としてあまり認知されていないような気がします。種が多くて食べにくいことや枝に多数のトゲがあることが問題なのかもしれません。前述のように最近では、海外で非常に珍重されている果物です。今後、日本でも消費が伸びることを願っています。



ロッセッティ作(1874)「ペルセポネ」